

△△△ 洋上を脅かす中国不審船 △△△
去る二月十日付の本紙が一面のトップと外信面で大きく報じた、中国船と見られる不審船が東シナ海公海上で一連の威嚇射撃や不法臨検、追跡などによって日本漁船や外国船を脅威にさらしているという事件は、まことに由々しき出来事であり、たんに尖閣列島などをめぐるわが国の主権にかかわる

正論

事柄であるばかりか、わが国の安全保障にとっても見過ごすことのできない重大問題である。しかもこの一連の事件は、今回突発的に浮上したのではなく、一部の良識ある人々の間ではその成り行きが大いに懸念され、案じられていた事柄である。例えば、この事件に関係の深い沖繩の『沖繩タイムズ』や『琉球新報』はしばしば問題を報じていたし、とくに沖繩テ

米カリフォルニア大客員教授 中嶋 嶺雄

毅然たる態度で真相究明を

レビは一貫して事件を追跡しており、私がしばらく日本を離れて米国で教鞭をとることになった昨年

「おおよび『東シナ海不審船等事件発生位置図』をもとにして、これらの事件が偶発的なものなのか、意図的なものなのか、私に意見を求めてきていた。台湾をはじめアジア諸地域の関心も高く、また、この二月初旬には『タイムズ』

清国海軍による威嚇を彷彿

という「友好一辺倒外交」「对中国位負け外交」が前提にあって、これほどの事態になっていても、できるだけ穏便に、できることなら事件を表沙汰にしたいという日本政府当局の考慮が働いていたからにはほかならない。

て該当する中国船の照会を中国当局に求めた」という。遅きに失した感はあるが、当然のことだといえよう。この二月二日に沖繩沖の公海上で鹿児島市の貨物船などが威嚇射撃を受けた事件については、中国当局が調査した結果、その事実を認め、「遺憾の意」を表明したという。

十一月末にも、第十一管区海上保安本部が十一月二十七日付で作成した「東シナ海不審船等事件一

の東京支局長がこの問題を含む中国の最近の海軍力増強に関して取材の電話を掛けてきたばかりであった。先週は日本の安全保障についての小さなセミナーが当地であり、招かれて出てみると、退役したばかりの米海軍将校と前駐日武官が報告していて、そこでもこの事件が話題になっていた。それはかりではない。現場でこれらの事件を目撃している海上保安庁の乗組員からは、この現状をどこへ訴えたらいのか、との痛切な声を幾度か聞かされたこともある。それはいうまでもなく、相手が中国であるために、日中友好の立場から中国当局を絶対に刺激したくないと

「外務省はこうした事態を憂慮して被害調査に乗り出し、明らかに中国船とみられるケース四十数件について在北京日本大使館を通じて

これまでの情報を分析してみると、不審な中国船が尖閣列島の東部の東シナ海の中心地域でかなり大掛かりな密貿易をやっているらしい。となると、諸般の事情からして、それはタバコなどはかりではなく、麻薬や中国製の武器(と

くに拳銃)が考えられる。しかもこれほどの継続性からすれば、この海賊行為には、中国当局とくにこの地域を管轄する中国海軍東海艦隊ないしはその高官が関与している可能性が濃厚である。

だとはすれば、これらの既成事実の積み重ねは、すでに昨年二月以来施行されている中国領海法の規定と相俟って、尖閣列島を含むこの海域の既得権化に繋がりがかねないのである。中国は現在、南シナ海の南沙諸島の領有を狙っているが、かつて一九七〇年代前半にベトナム(旧南ベトナム)と軍事紛争まで起こした西沙諸島に関しては、その後に着々と既成事実を積み重ね、その中心の永興島には約千人の兵員や住民を居住させて近く市制をしくことになっている。



▲▲▲ 東シナ海域を既得権化 ▲▲▲
もっとも本紙の報道によれば、北の東シナ海の中心地域でかなり大掛かりな密貿易をやっているらしい。となると、諸般の事情からして、それはタバコなどはかりではなく、麻薬や中国製の武器(とくに拳銃)が考えられる。しかもこれほどの継続性からすれば、この海賊行為には、中国当局とくにこの地域を管轄する中国海軍東海艦隊ないしはその高官が関与している可能性が濃厚である。

▲▲▲ 政府やマスコミも動け ▲▲▲
いづれにせよ、沖繩をはじめ、九州各県、山口県などの船舶が中国船によって威嚇され続けているという今回の事態は、石光眞清がその手記『城下の人』(中公文庫)でも描写しているように、ちよと今から百年前、日清戦争をよぎなくされた一因として、一八九二年から九三年ごろ、当時のわが国の九州や琉球の沿岸海域が強大な清国海軍の相次ぐ威嚇や脅威にさらされた歴史的事実を彷彿とさせる。もとより現在の国際環境は当時と大きく異なっている。日中友好関係は日本外交の重要な支柱になっており、昨秋は日中国交二十年を記念して天皇訪中も実現した。それなのにまさかこの時期、中国側の不審船の動きが活発化し、すでによく知られているように、中国は過去三年で五十数%も軍事費を増大し、特に海軍力の強化を図っている。一方、わが国政府は、つねに及び腰で、中国側への嚴重な抗議や真相の徹底解明に乗り出さずとしたがらない。日本の海の安全保障の重要性をいち早く喚起し、また名著『氷川清話』では中国(清国)と中国人のしたたかさを説いてやまなかった勝海舟が当今の実態を自嘆していたら、さぞかし慨嘆することであろう。

(なかじま・みねお)